

薄曇りの夜だった。きつちり三日間降り続いた雨は漸く峠を越し、しかし皮膚の内側をじつとりと浸食するような湿気は月の無い空を一層重苦しいものになっている。家路を急ぐ人々の足取りが心成しか軽そうに見えるのは、きつと週末の晩だからという理由だけではないだろう。この辺り一帯は様々な企業のビルやら大学、果てはセレブ御用達の高級住宅と、まるで大小取り混ぜた建物の見本市のようだ。かといつて決してごみごみしている印象があるわけではないのは、駅から程近くに位置する広大な公園のお蔭かもしれない。

成金どもめ。ほんやりと腰かけた遊具を無意識に揺らしながら、フランシスは拗ねた気持ちでそう呟いた。この辺に住んでる奴らなんてどうせ金持ちばかりだ。彼が体重を移動させる度に、キイキイと軋んだ音が響く。どうやらスプリングシューという名前の遊具らしい。半ば塗装の禿げたパンダは暗がりでは不気味な代物以外の何物でもなく、道行く人の足を止めさせるには十分な威力である。

胸ポケットから煙草を取り出そうとして、止めた。今日は携帯灰皿を忘れたのだった。ついていない。

全く以ってついていない。思えば朝から良かったと思えるようなことなどこれっぽちもない一日だった。ツキに見放された、とでも言えば良いだろうか。まずは定期が切れていた。自動改札で無情に行く手を阻まれる気恥ずかしさといったら、言葉にならない。その後券売機で切符を買い、全力疾走の末駆け込もうと試みた電車はこともあろうに目の前で扉を閉じた。周囲の目は当然可哀想なガイジンさん、といった体で、かといつて話しかけてくるような酔狂な輩もない。話しかけられたところで当惑するしかなかつたろうが、見てんじゃねえよそんなにガイジンが珍しいかよ田舎者が、などと叫びださなかつただけ理性的だったと自分を慰めている。

そして、アレだ。

大きく溜息を吐き出して、フランシスは立ち上がった。やはり煙草が吸いたい。さして腹は減っていないが、思い浮かんだ場所はただ一つ。

「……行くか」

言つて、踏み出した瞬間。

「——」

目が合った。によりりと細長い、紐のような物体。